

山麓のため池の畔で、鮮やかな**瑠璃色**（るりいろ）の実を見つけました。

ツル性の植物で葉は**三角形**、印象的なのは実を載せるお皿のような「**托葉**」があることで、その中心を茎が貫いているのです。

その瑠璃色の実を観察しようと茎に手を伸ばすと...

“あ痛っ！！”

何と茎や葉柄には、結構鋭い「**棘**（とげ）」がいっぱい付いていたのです。

これだけ特徴があれば、種の同定も比較的容易です。

図鑑で調べてみると...

「**イシミカワ**」という名前の、イヌタデの仲間でした。

そう言えば、河内長野市には「**石見川**」という地名や川があるな...と、その時ぼんやりと思ったのですが...

さらに調べてみると、その地名との間には結構深い関係があったのです！！

この植物が「**イシミカワ**」と呼ばれるようになった**由来**には、主に次の3つの説があるようです。

河内長野市の「**石見川村**」における弘法大師の伝説から「**石見川**」

果肉の中に石のように硬い実が入っていることから「**石実皮**」

江戸時代に接骨薬として使われており、“骨をつなぐ”の意から「**石膠**（イシニカワ）」

さて、この中の “伝説” の概要は...

弘法大師が一泊のお礼として、草の種子と、その根や茎葉を使った打ち身等の薬づくりの方法を授けた、と伝えられており、その場所の地名（石見川村）から草の名を「**イシミカワ**」と呼ぶようになった、ということだそうです。









